



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	成る存在としての人間、人類(1) —サン=テグジュペリの『人間の大地』について— Man and Mankind as an Evolving Being (1) -On 《Terre des Hommes》 by Saint-Exupéry-
Author(s)	木谷 吉克 (KITANI Yoshikatsu)
Citation	研究紀要 (SHOIN REVIEW), 第 43 号 : 41-65
Issue Date	2002
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

成る存在としての人間、人類(1)

——サン＝テグジュペリの『人間の大地』について——

木 谷 吉 克

『人間の大地』は、主人公を中心として筋が展開してゆくというふつうの小説の形式をとっていない。この作品では、作者であるサン＝テグジュペリ自身が実際に体験し、見聞したさまざまなエピソードがつなぎあわされて、ひとつの全体が構成されている。そのため、いろんな話が雑多に寄せ集められているような印象を受けるかもしれない。しかしながら、それらの話の底にはいくつかの共通のテーマが流れているのであり、テーマ自体も相互に関連するものであるため、内容のうえでは、各エピソードは相互に密接に関連していると言える。

『人間の大地』を貫く主要なテーマは、冒頭の短い序文のうちにすべて提示されている。つまり、障害による人間の自己発見というテーマであり、飛行機による認識というテーマである。さらには、人間の意識の意義というテーマと、人間を相互に結びつける絆のテーマである。この主要な四つのテーマが、あとの八つの章のなかで、さまざまなエピソードを通して展開されてゆき、変奏されてゆく。とはいえ、これらのテーマの底にあって、それらをたがいに結びつけるものがなお存在する。それはサン＝テグジュペリが生涯追究したもの、人間とは何かという問題、人間にとって生きるとは何かという問題である。『人間の大地』は、地球という大地に住むいろんな人間たちの生きざまを描きつつ、それらを通して人間とは何か、また生きるとは何かという問題の、作者自身の追究の書であるとも言えるだろう。この小論が目指すものは、そうした問題についてサン＝テグジュペリがどのように考えていたのかを明らかにすることである。

1. 粘土

サン＝テグジュペリが人間をどのような存在ととらえていたのかという問題にとりかかる出発点として、まず『人間の大地』のなかの粘土のイメージをとりあげたい。

サン＝テグジュペリは1935年に『パリ＝ソワール』紙の特派員としてロシアへの旅に出る。その途上、モスクワへと向かう汽車のなかで出会ったポーランド人労働者たちの話は、『パリ＝ソワール』紙に記事として掲載される。この記事は一部の修正を施されて『人間の大地』の最後を飾るエピソードとしてそこに収録されることになる。

「だが三等車には、フランスで解雇され、祖国ポーランドに帰る数百人のポーランド人労働者たちで溢れていた。(…) それらの人びとはすべて、悪夢のなかに沈みながら、貧困へと立ち戻りつつあった。髪を短く刈りこんだ大きな頭がいくつか、座席の腕木のうえで揺れていた。男たちも、女たちも、子どもたちも、すべてが、眠っていても彼らを脅かすその騒音、その振動に責めさいなまれるように、右に左に寝返りをうっていた。彼らは安らかな眠りという歓待を見出せずにいたのだ。」⁽¹⁾

これらポーランド人労働者たちを前にして、語り手は、彼らが「半分人間的特質を失ってしまっている」ように感じる。さらには、そのうちのひとりの男について、「男は粘土の塊に似ていた」とも言っている。人間は「美しい粘土」⁽²⁾として生まれるというのに、なにゆえこの「美しい粘土」はそこなわれ、干からび、固くなって、ぶざまな「粘土の塊」と化してしまうのかと、語り手は疑問を呈している。

ところで、この「美しい粘土」と「粘土の塊」の対照に、サン＝テグジュペリの基本的な人間観が表われていると言ってよいだろう。このあとに続く有名な一節では、「美しい粘土」のひとつの具体例である「子ども」が「少年モーツァルト」に喩えられている。語り手は、同じ車内で、一組の夫婦のあいだで熟睡しているひとりの子どもを目にする。

「子どもは眠ったまま寝返りをうち、終夜燈の明かりのしたでその顔が見えた。

ああ！　なんというすばらしい顔だろう！　その一組の夫婦から、一種黄金の果実が生まれたのだ。それら鈍重な一対から、魅力と優雅さとの傑作が生まれたのだ。わたしは、そのつややかな額、その愛すべきおちょぼ口をのぞきこんだ。そして思った。これこそ音楽家の顔だ、これこそ少年モーツァルトだ、これこそ生命の美しい約束だ、と。』⁽³⁾

人間はすべて、この子どもと同じように、「一種黄金の果実」として、「生命の美しい約束」として生まれてくる。言いかえるなら、人間は将来大きく花開くべき広大な可能性をもって生まれてくる。だが、この可能性が実現されるのは稀である。そこに語り手の苦しみがある。「美しい粘土」がなにゆえ「粘土の塊」になってしまうのか。それは貧困のせいでもなければ、その人間自身の怠惰や自堕落のせいでもない。それは、自分が広大な可能性をもって生まれてきたことに気づいていないところからくるのである。多くの人間は自分のうちなる「モーツァルト」に気づかず、それを殺してしまっている。あのポーランド人労働者たちも、もともとあのような人間になるようには創られてはいなかった。彼らが自分のなかの「モーツァルト」に気づいてさえいれば、彼らはそれを育成し、みごとに花開かせたであろう。彼らを前にしての語り手の苦しみは、手入れの悪い植物を前にして、手入れさえよければこんな姿にはならなかったのにと嘆く庭師の苦しみと同じである。

「わたしを苦しめるのは、庭師としての観点だ。わたしを苦しめるのは、結局のところ、怠惰とおなじように、けっこうそのなかに身を落ちつけてしまうかの貧困ではない。(…) わたしを苦しめるものは、施しのスープによってもけって癒されることはない。わたしを苦しめるものは、あの窪みでも、あの出っぱりでも、あの醜さでもない。それは、いわば、あの人びとひとりひとりのなかの虐殺されたモーツァルトなのだ。』⁽⁴⁾

では、なにゆえ多くの人間は自己のうちなる「モーツァルト」に、自己のうちなる広大な可能性に気づかないのか、また、どのようにすればそれに気づくことができるのだろうか。この問題については、あとの章で追って考えてゆくことにしたい。

2. 障害

『人間の大地』は次のことばによって始まる。「大地はわれわれ人間について、万巻の書物より多くのことを教えてくれる。大地はわれわれに抵抗するからである。障害と力くらべをするとき、人間はおのれを発見する。」⁽⁵⁾

このことばでサン＝テグジュペリが言わんとしているのは、人間が自らのなかに隠されているさまざまな可能性に気づくためには、人間は障害にぶつかる必要があるということである。つまり、人間は障害とたたかうことによって、自分というものを認識してゆく。例えばウィリアム・ジェームズによれば、人間はふだん持てる力のほんの一部しか用いていない。⁽⁶⁾ しかし、ひとたび危機的情况に遭遇し、それに立ち向かわねばならぬとき、人間は持てる力のすべてを動員しようとする。そうして、それまで隠れていた自分の真の力量に気づくのである。人間は平生、生命力を低レベルに合わせたまま生きている。そしてこの低いレベルの生命力を自分の真の姿であると錯覚している。その錯覚から、人間はちっぽけな存在であり、生は無意味であるという悲観的な思想も生まれてくる。しかし、人間は本来もっと偉大で高貴な存在であるとサン＝テグジュペリは考えている。そして、それを教えてくれるのが、ほかならぬ障害なのである。

『人間の大地』で、サン＝テグジュペリは、障害、脅威、危険等がいかに人間をふだんの自己を超え、ある偉大さ、ある高貴さにまで高めるかを、種々のエピソードを通して語っている。

不帰順地帯の外れに位置するポール＝テチエンヌは、周囲の砂漠に守られてほとんど難攻不落であり、マウル人の襲撃隊がこのポール＝テチエンヌを襲うためには、「ものすごい砂と酷熱の带状地帯」を越えてこなければならない。それゆえ、事実上、マウル人の襲撃隊がこの地に到達することは不可能である。しかし、ポール＝テチエンヌの人たち、総督の大尉やセネガル人の歩哨たちは、つねにその襲撃隊の接近を予想し、それにそなえている。この幻の襲撃隊が、人々に脅威をもたらし、それにそなえる人たちの心を緊張させている。人影におびえ、誰何する「歩哨の呼び声^{すいか}が世界のなかに凜^{りん}としたものを再建」し、砂

漠はもはや空虚な世界ではなく、びんと張りつめた「莊嚴な」世界と化する。人間たちもまたこの襲撃隊の脅威によって、自らの高貴さを取り戻す。「このような脅威は私たちになんという高貴さを取り戻させてくれたことか！」⁽⁷⁾

帰順したエル・マムーンが、同行していたフランス人将校たちを殺害し、再び不帰順部族のもとに帰ったのも、自らの失われた偉大さ、高貴さを、再び取り戻すためにはかならなかった。エル・マムーンは帰順することによって物質的には豊かになり、身の安全も保障されたとはいえ、その代償に多くのものを失ったことに気がつく。

「失墜した戦士として、もはや牧人にすぎなくなった彼は、そのとき思い出したのだ。自分がかつてはサハラ砂漠に住んでいて、そこでは砂の襲のひとつひとつが、かくされた脅威に満ち満ちていたことを。そこでは、夜間に前進した野営地が、その先端に物見を配置し、敵の動きを知らせる報告が、夜のかがり火のまわりで、人びとの心を高鳴らせたということ。つまり彼は、男がいちど味わったからにはけっして忘れることのできぬ、沖の海原の味わいを思い出したのだ。

ところが今日、彼は栄光もなく、平定されていっさいの魔力を失った空間のなかをさまよっているのだ。今日はじめて、サハラは単なる砂漠になってしまったのだ。」⁽⁸⁾

エル・マムーンは物質的には豊かになったが、精神的には貧しくなった。手に入れた安全の代償に、生の躍動感ともいうべきものを失ったことに気がついた。昔はさまざまな脅威に取り巻かれ、たえず心に張りがあったし、敵の行動のひとつひとつに胸を高鳴らせた。誇り高い戦士として、脅威と危険のなかで日々生きることに充実を覚えていた。だが、今では、いわば身の安全と食物を主人から与えられて生きる家畜のようなものになりさがってしまったように感じていた。脅威が取り払われた砂漠は、かつての莊嚴さを失い、空虚な「単なる砂漠」になってしまった。そこで、砂漠の生活にもとの活力を回復させ、おのれ自身を取り戻し、自分の人間としての尊厳、戦士としての誇りを再興するために、突然の反逆という拳に出たのである。

フランス人として生まれながら、マウル人の遊撃隊を率いて、襲撃と掠奪を

ほしいままにするボナフーもまた、砂漠に脅威をもたらせて、砂漠を張りつめた荘厳な世界に変えている。ボナフーに立ち向かう襲撃隊に加わるようになったムーヤンについて、語り手は次のように言っている。

「だが、襲撃隊に加わることにして以来、彼はなんと変わったことだろう！
むかしとおなじように、彼はおのれ自身の気高さを感じ取り、私を軽蔑で踏みにじろうとしている。」⁽⁹⁾

つまり、ボナフーは克服すべき強大な障害として、砂漠に住む人々の前に立ちはだかり、彼らのなかに眠っていた力を、気高さを、偉大さを目覚めさせる。人々はボナフーのおかげで、生の充実と躍動を感じることができるようになり、生きる意味、生きる目標を見出すことができるのである。

障害や脅威や危険に立ち向かうとき、人間は平素の安全で安穏な生活においては用いることのない力を動員する。そうすることによって、人間はおのれの秘められた力を発見し、おのれ自身の偉大さと気高さを発見する。しかし、障害は人間の本来的な偉大さや高貴さを教えてくれるだけではない。人間をそうした偉大さや高貴さの実現へと向かわせるのもまた障害なのである。障害は人間を鍛えあげる修練の場を提供する。

『人生に意味を与えなければならない』と題された記事のなかで、サン＝テグジュペリは言っている。「自己を捧げること、危険、死にいたるまでの忠誠、それらこそ人間の高貴さを築きあげるに大いに貢献した修練である」。⁽¹⁰⁾また、『手帖』のなかには、次のようなことばが見出される。「強い人間をこねあげるためには厳しい掟が必要だということを私たちはよく知っている。」⁽¹¹⁾

すでに述べたように、サン＝テグジュペリにとって、人間は「美しい粘土」として生まれる。しかし、この「美しい粘土」は、人間がそれをこねあげるのを怠るなら、干からび、固くなって、単なる「粘土の塊」と化してしまうのである。したがって、サン＝テグジュペリの人間観をより正確に言い表わすためには、「人間は美しい粘土として生まれる」というだけでは十分ではない。「人間はこねあげなければならない美しい粘土として生まれる」と言い換えなければならないだろう。

この人間観は、前作の『夜間飛行』にすでに表われていた。『夜間飛行』の

主人公リヴィエールは、部下に苛酷な規則を課する。その規則は憐憫や同情によっていささかも緩められることはなく、一見不当に見えさえする。しかし規則の正当、不当など、リヴィエールにとってはどうでもよいことなのである。リヴィエールにとって、規則とは「宗教の祭式」のようなものであり、「人間を鍛えあげる」べきものであったからである。

「彼にとって人間は、こねあげねばならぬ生のままの蠟だった。その物質に魂を与え、意志をつくり出してやらねばならない。彼はそのような苛酷さによって彼らを屈従させようとは考えていなかった。ただ、彼らを自己自身のそとに引き出そうと考えていたのだ。」⁽¹²⁾

『人間の大地』の「粘土」のイメージは、『夜間飛行』では「生のままの蠟」のイメージで現われている。いずれにせよ、人間はそれをこねあげ、たえず自己を創造してゆかねばならない。現在の自己を乗り超えて、たえず生成してゆかねばならない。この自己創造、自己超越に規則は手を貸すのである。このたえざる自己創造と自己超越によって、人間は「魂」と「意志」をそなえた「人間」として存在するようになる。「粘土」であれ、「生のままの蠟」であれ、人間はまず不定形なものとして生まれる。人間はこの不定形な「粘土」、「生のままの蠟」をこねあげて、形あるものにしてゆかねばならない。

人間を鍛えあげるためには、あるいは、人間がおのれをこねあげてそれを形あるものにしてゆくためには、障害や厳しい掟が必要である。とすれば、障害に背をむけてただ安穩に生きてゆこうとすることは、自らの隠れた力に気づく機会を失うだけでなく、自己創造、自己超越によって自らを生成させてゆく機会をも逸することになるだろう。『人間の大地』で、語り手の初の郵便飛行の朝に、空港へと向かうバスに乗りあわせた税官吏や役人たちは、まさに障害に背を向けることによって、自らの偉大さ、高貴さを、「灰色の牢獄」のなかに閉じこめてしまったのである。

「老いたる役人よ、いまここにいるわが仲間よ、だれもきみを脱出させはしなかったが、それにたいしてきみにはまったく責任がない。きみは、白蟻がそうするように、光に向かうあらゆる出口をセメントでふさいだあげく、きみの平和を築きあげたのだ。きみは小市民的な安全、慣例、地方生活の息もつまる

因習のなかに、からだをまるめてもぐりこんでしまったのだ。きみは、風と潮と星々に対してささやかな壁を立ててしまったのだ。きみはけっして、大きな問題に心をわずらわすことをのぞまない。きみの人間としての条件を忘れ去ることに十分苦労してきたのだ。きみはさまよえる遊星の住民ではないし、答えのない問いを自分に提起するようなことはけっしてしない。きみはトゥールーズのひとりの小市民だ。まだ間に合うときに、だれもきみの肩をつかんでくれなかった。いまや、きみが形づくられていた粘土は乾き、固くなってしまった。こんご、きみのうちなる何者も、おそらくは最初きみに宿っていたはずの、眠れる音楽家、詩人、あるいは天文学者をめざめさせることはできないだろう。』¹³⁾

「老いたる役人」「いまここにいるわが仲間」と呼ばれている人たちは、障害に立ち向かってゆくどころか、障害に背を向けて、生活の平和や安定や安全ばかり求めている。そのため彼らは、自分のなかにある大きな可能性に気づくこともなかったし、自らのうちなる隠れた力を発見することもなかった。おそらく彼らはモーツァルトのような音楽家や、詩人、天文学者といった人間にもなりうる可能性をもっていたのに、自らの粘土をこねあげる機会を逸したがために、今ではその粘土は乾いて固くなってしまっている。

ところが、語り手は、「だれもきみを脱出させはしなかったが、それにたいしてきみにはまったく責任がない」、「まだ間に合うときに、だれもきみの肩をつかんでくれなかった」と言っている。つまり、この老いたる役人たちが今あるような人間になったのは、彼ら自身の責任ではないというのである。

このことばの意味するところを理解するためには、サン＝テグジュペリのいわゆる「召命」について考察してゆく必要があるだろう。

3. 召命

わたしたち人間はすべてその内部に「未知の人間」を宿している。それは各人がそうなることのできる人間であり、またそうならねばならない人間であっ

て、サン＝テグジュペリにとっては、それこそ「真の自分」なのである。『人間の大地』のいわば結論の章とも言える最後の章、『人間たち』の冒頭で、前章で語られたリヴィア砂漠での遭難と奇跡的な生還の体験を踏まえて、語り手は次のように述べている。

「またしてもわたしは、ある真実のそばを通りながら、そのときはそれを理解しなかったわけだ。わたしはもう駄目だと思った。絶望の底に触れたと思った。しかも、ひとたび諦めというものを受け入れたあと、平和を知ったのだ。あのような状況においては、ひとはおのずとほんとうの自分を見出し、自分自身の友となるらしい。」^[94]

ある種の危機的な状況においては、人はその危機を乗り越えるために必死になって闘う。そのとき人は、ふだんは思いもしなかった自分の力量に気づく。ふだんは隠されていたほんとうの自分を見出す。つまり、人は自分の内部に眠っていた「未知の人間」を目覚めさせ、解放するのである。サン＝テグジュペリによれば、わたしたち人間はすべてこの「未知の人間」、ほんとうの自分を解放することを求めている。これに続くことばのなかの「ある本質的な要請」とは、そのような欲求を指すものであるだろう。

「わたしたちのうちには、みずから意識しないある本質的な要請があるものだが、わたしたちの内部でそれを満足させてくれる充実の感情にまさるものはやなにもない。」^[95]

ところで、ここで注意しなければならないのは、その欲求が無意識的なものであるということ、さらには、その欲求の充足が、「充実の感情」によってそれとわかるということである。したがって、その欲求を満足させる条件を予見することは不可能であり、ただ結果から遡及的に眺めることしかできない。ある情況、ある条件が人に充実の感情をもたらすとき、人は、はじめて、その情況、その条件が自分のなかの「本質的な要請」に応えるものであったことを理解するのである。「本質をなすもの、わたしたちはそれを予見することはできない。わたしたちはそれぞれ、なにものもそれを約束してくれていなかったところで、もっとも熱い飲びを味わってきたのだ。」^[96]

人間に充実の感情を与えるこのような条件は、単に予見不可能というだけで

はない。万人に有効な普遍的な条件などというものはないのであり、個々の人間によってそれは異なるのである。この条件、それを語り手は「真実」ということばで表わしている。

「わたしたちを肥沃ならしめる未知の条件が存在するということをのぞいて、わたしたちはなにを知っているだろうか？ 人間の真実とはどこに宿っているのだろうか？

真実とはけっして論証されるものではない。他の土地ではなく、その土地のなかで、オレンジの木が丈夫な根を張り、実をつけるとすれば、その土地こそオレンジの木にとって真実である。他のものではなく、その宗教、その文化、その価値基準、その行動形態がその人間にかの充実の感情を与え、彼のうちに知られずにいた王者を解き放つとすれば、その価値基準、その文化、その行動形態がその人間の真実であるからだ。』⁹⁷

人は自らの「真実」を意識的に選びとるのではない。まず、まるで偶然のように「真実」が人を訪れるのである。そうしてのち、その「真実」のもと「充実の感情」、さらには自らのうちに「知られずにいた王者」の解放とによって、人はそれが自らの「真実」であることに気がつく。こうして、改めて人はその「真実」を自らの使命として、天職として、すなわち「召命」⁹⁸として選びとるのである。それゆえ、召命を見出すためには、まずもって自らの「真実」との幸運な出会いがなければならないだろう。召命に目覚めた人間と、そうでない人間とを分けるものは、このような出会いに恵まれたか否かの違いだけである。

「この書物を通じて、わたしは、おそらくは至高の召命に従い、他の者なら修道院をえらんだであろうように、砂漠なり定期航空路なりをえらんだ人たちのいくたりかについて語ってきた。しかし、まずその人間たちを讃えるように強制したように見えたとしたら、わたしは目的を裏切ってしまったことになる。まずもって讃えるべきものは、彼らを築きあげた土壤なのだ。』⁹⁹

『人間の大地』のなかで、ここまで語り手が語ってきた、「至高の召命」に従い、「砂漠なり定期航空路なりをえらんだ」者たちを、語り手は「数名の人間」と呼んでいる。この「数名の人間」は、一見、選ばれた人間、他の人たち

にはないなにか優れた資質や才能によって、そのような生き方を選んだように見えるかもしれない。しかし、けっしてそうではない。そうした者たちは少しも特別な人間ではない。ただ彼らは「土壌」に、つまり環境や状況に恵まれたのであり、それによって自らの召命を見出しただけにすぎないと語り手は言うのである。

召命に目覚めた人間は、それによって自らの本来の偉大さを解放してゆくことができるだろう。だが、彼らの偉大さは、彼らに特有のものではない。すべての人間がうちに偉大さを宿しているのである。「難破や火災の夜に、自己自身をうわまわる偉大さを発揮した小商人」は、そのとき、たとえ一瞬とはいえ、自己の本来の偉大さをかいま見ることができたはずである。しかし、「新しい好機にめぐまれなかったために、成育に適した土壌や、厳しい要請を課する宗教が得られなかったために、おのれ固有の偉大さを信じることができず、彼らはふたたび眠りこんでしまった」⁹⁴のである。自らの「真実」との幸運な出会いにめぐまれなかったために、「成育に適した土壌」に自分を植えこむことができず、「厳しい要請を課する宗教」をおのが召命とすることができなかったのである。

というのも、「おのれ固有の偉大さ」を解放するためには、人は召命に目覚めることが必要だからである。言いかえるなら、わたしたちの内部に宿っている「未知の人間」を解放し、「真の自分」を解き放つためには、結局のところ、人は召命に目覚めなければならないのである。したがって、前述の「未知の人間」、「真の自分」を解放せんという欲求、つまり、わたしたち人間のなかの「みずから意識しないある本質的な要請」を、「召命への欲求」と言いかえてもよいだろう。「難破や火災の夜に、自己自身をうわまわる偉大さを発揮した小商人」が、結局は「ふたたび眠りこんでしま」い、真の自己解放にいたらなかったのは、自己のうちなるこの「召命への欲求」の解放がなかったからであると言えるだろう。この「小商人」の話のあとに、ひとつの結論のように置かれていることは、つまり、「召命が人間の自己解放を援けてくれることは言うまでもない。だが、召命を解き放つことも同様に必要なのである」⁹⁵ということばのなかの、「召命を解き放つ」とは、それゆえ、そうした「召命への欲求」を

解き放つという意味にとるべきだろう。本来、人間はすべて「召命への欲求」を持っている。しかし、多くの人間はその欲求を眠らせたままにしている。したがって、まずこの「召命への欲求」を目覚めさせ、解き放たなければならないというのが、このことばの真意であるだろう。

「至高の召命」に従い、「砂漠なり定期航空路なりをえらんだ」者たちを、語り手が「数名の人間」と呼んでいるということはすでに述べた。この「数名の人間」に、語り手は「すべての人間」を対比させる。

「飛行の夜、砂漠の夜……こういったものは数少ない機会であって、すべての人間に与えられるというものではない。しかしながら、状況が彼らを鼓舞するとき、彼らはすべておなじ要請を表明するのだ。スペインでの一夜がそのことをわたしに教えてくれたのだが、その一夜について語ってもけっして主題からそれることにはならないはずだ。わたしは数名の人間について話しすぎたから、できればすべての人間について語っておきたいと思う。」²²

「すべての人間」とは、いわばふつうのありふれた人間を指すものである。しかしながら、そうした人間もまた「土壌」に恵まれるなら、「数名の人間」と同じように自らの召命に目覚めることができるのであり、自らのうちなる「未知の人間」を目覚めさせ、「真の自分」を解放することができるのである。その意味で、「数名の人間」と「すべての人間」はけっして対立するものではない。「すべての人間」とは、ふつうのありふれた人間を指すと同時に、「数名の人間」をも包括する人間の真の姿を指し示すものなのである。

この「すべての人間」の具体例として語られる、内戦のさなかにあるスペインのアナーキストの軍曹は、かつてバルセロナで「しがない会計係をしていた」人物で、「祖国の分裂」にもたいして関心は持っていなかった。しかし、同僚がひとりふたりと志願してゆくにつれて、「奇妙な変貌」²³を受け、戦死したひとりの同僚の計報に触れて、突如戦線に赴くことを決心する。マドリッドの前線で、生きて戻ることはほとんど望むべくもない無謀な攻撃へと向かう日の朝、戦友たちに起こされ、立ちあがった軍曹は微笑を浮かべる。「人間が出現するのはこの瞬間だ。人間が論理の予測からのがれるのはこの瞬間だ。軍曹は微笑を浮かべていたのだ！」²⁴

今から確実に死ぬことになる攻撃に出かけるというのに、軍曹は微笑を浮かべていた。このようなときに人間が微笑を浮かべるなどというのは、理屈にあわないことである。しかし軍曹は微笑を浮かべている、あらゆる論理の予測に反して。この微笑は何を意味するのだろうか。「人間が出現する」の「人間」とは、すでに述べたあらゆる人間のうちに宿っている「未知の人間」、「真の自分」を意味するだろう。同じ『人間たち』の章のなかで、語り手はもう一度この軍曹をとりあげて、次のように言っている。

「おのれの内部に未知の人間が眠っているなどと予想すらしていなかった男、だが、バルセロナのアナーキストたちの地下室で、自己犠牲と、相互扶助の精神と、正義への鞏固なる表象のゆえに、ただいちど、その人間がめざめるのを感じた男、その男はもはやただひとつの真実しか知ることはないだろう。それはアナーキストたちの真実だ。」²⁶

つまり、このとき、軍曹のなかに眠っていた「未知の人間」が目覚め、軍曹は今まで気づきもしなかった「真の自分」を見出したのであり、自らの真の偉大さに到達したのである。自分の信じる正義のために命を賭け、同じ目的によって結ばれた同胞たちに先んじて自分を犠牲にする、それは軍曹にとって、まさにおのれの生をまっとうすることであった。軍曹は、この瞬間、はかり知れない充実の感情を味わっていたのであり、生きることの喜び、あるいは生きたことの喜びを味わっていただろうし、「もはや自分の運命を裏切ってはいないという感情」²⁶、「自己を完成させているという感情」²⁷を味わっていたのである。軍曹の微笑はそのような喜び、そのような感情からきたものであるだろう。

この軍曹の「奇妙な変貌」を説明するために、語り手は野鴨の飛翔に引き寄せられる家鴨の話と、人間に飼いならされたものの、やがて自分たちの閉じこめられている小さな柵を越え出ようとする羚羊の話を取りあげる。

まだ小さいうちに捕獲された羚羊たちは、すっかり人間に飼いならされて、「手から餌を食べるようになる」。「撫でさせてもくれるし、掌のくぼみに湿った鼻先を押しつけてくる」。「だが、そんな彼らが、小さな角で、砂漠の方角に向かって柵をしきりに押しているのに気づく日がやってくる」。とはいえ、羚羊たちは、自分たちが飼い主から逃れようとしているのだとは気づいていない。

相変わらず人間たちの愛情を受け容れるし、自分たちも人間たちに愛情を示しはする。だが、なにかわからぬ磁力に引き寄せられて、羚羊たちはたえず柵のほうに戻っては、その向こうに越え出ようと空しい努力を続ける。この磁力とはいったい何なのか。

「彼らが探し求めているものを、あなたがたは知っている。それは彼らを完成させてくれるはずの拡がりなのだ。羚羊になること、羚羊の舞踊をおどることをのぞんでいるだ。」²⁶¹

つまり、羚羊は自らの奥深くから突きあげてくるある要請に悩んでいる。現在の家畜としての生活のなかでは満足させることのできないある要請に苦しんでいる。その要請とは、羚羊本来の生への欲求、ちっぽけな空間のなかで安全を保障されて生きるよりも、たとえ危険にさらされようと、広い無限の空間のなかで生きたいという欲求にとらえられているのである。そのような生こそ羚羊本来の生であり、それでこそ羚羊は羚羊になることができる。ジャッカルやライオンに命をねらわれる危険性さえ、羚羊が自分以上の力を発揮するのに役立ち、そのような危険と隣りあわせの生こそ、羚羊を鍛え、羚羊を完成させてくれるのである。

羚羊を苦しめるこの要請は、本能的なもの、生来のものであり、この要請を満足させるためには、広大な無限の空間と、乗り越えるべき障害、つまり危険が必要なのである。もうひとつの家鴨の話においても、家鴨は野鴨の飛翔に磁化されて、自らのうちに眠っていた本能的な「野生の名残り」を目覚めさせる。家鴨は、突如、「野鴨になろう」という欲求に突き動かされ、広大な空に飛び立とうとする。

「移住の季節がきて、野鴨が空をわたるようになると、彼らが見おろして飛ぶ地域に奇妙な潮の流れが生じる。家鴨たちが、その雄大な三角形の飛翔に引き寄せられるように、不器用に飛び立とうとしはじめるのだ。野生の呼び声が、彼らのうちになにか野生の名残りをめざめさせたのだ。すると、しばらくのあいだ、農家に飼われる家鴨たちは渡り鳥に変貌する。沼とか、みみずとか、鳥小屋とかといったつまらぬ表象が堂々めぐりしていたその小さく暗愚な頭のなかに、大陸的な拡がり、沖を吹く風の味わい、海原の地理学が展開しはじめる。

家鴨たちはそれまで、自分の脳髓がそんな多くのすばらしいものを含みうるほど広大であるとは知らなかった。ところがいまや、羽根をばたつかせ、穀粒を軽蔑し、みみずを軽蔑し、野鴨になろうとのぞんでいるのだ。²⁹

家鴨もまた、「沼」「みみず」「鳥小屋」といった、安全を保障されているものの、あまりにもちっぽけな生活空間のなかでは満足させることのできない生を生きたいという要請に目覚める。そして、今や家鴨の「小さく暗愚な頭のなかに、大陸的な広がり、沖を吹く風の味わい、海原の地理学が展開しはじめる。」

ところで、この「沖を吹く風の味わい」という比喩は、『人間の大地』のなかに何度か印象深く現われてくる「海原の風」、「沖の風」に関する比喩のひとつである。これらの比喩は、『人間の大地』という作品のなかである重要な意味を担っているものであり、その意味を明らかにすることによって、軍曹の行動の意味もまたより鮮明なものとなるだろうし、さらには、人間にとっての召命の意義や、召命への欲求を解放することの重要性についても、新たな視点から見直すことも可能となるだろう。それゆえ、「海原の風」「沖の風」の比喩について、新たに章を設けて検討してゆきたい。

4. 海原の風、沖の風

『人間の大地』には、「海原の風」、「沖の風」に関する比喩が何度か現われてくる。例えば、帰順したエル・マムーンが、かつての危険に満ちた生活のなかで味わっていた心の躍動感、充実感は、「沖の海原の味わい」ということばで表現されている。

「つまり彼は、男がいちど味わったからにはけっして忘れることのできぬ、沖の海原の味わいを思い出したのだ。」³⁰

また、砂漠の盗賊団の首領であるボナフーに立ち向かう、襲撃の準備を整えた人たちについても、「沖の風」の比喩が使われている。

「すでにわたしにはあることがわかっていた。三日まえからしきりと井戸に連

れてゆかれていたらくだたち、長談義、興奮状態。まるで、目に見えない帆船の出港準備をととのえているようだ。それを運び去る沖の風はすでに吹きはじめている。」⁽³¹⁾

「それを運び去る沖の風」とは、ボナフーへの攻撃のための準備を終えた人たちを、いよいよ攻撃へと向かわせるある種の力を指すものであるだろう。さらには、そうした攻撃への参加をひとつの使命として自らに引き受ける心とか、これから危険に立ち向かってゆこうとする人たちの心の興奮、心の高揚をも象徴するものであるだろう。

「海原の風」、「沖の風」は、海という広大で荒々しい世界に吹く風である。海をゆく船、海原を翔ける鳥は、この風に抗して進んでゆかねばならない。そこから、「海原の風」、「沖の風」は、広大な世界の荒々しい力を連想させる。それは人間が克服してゆかねばならない大きな障害、危険や脅威や、あるいは自然の強大な力とか運命の力といったものを象徴するものであるだろう。しかし、それだけではなく、人間をそうした広大で荒々しい生へと呼びかけ、誘う力をも指すように思われる。あの、かつて「しがない会計係」をしていたスペインの軍曹を戦線へと赴かせたのは、まさにこのような風であった。

「ところがその計報は、一陣の海風のように、きみのうえ、きみの狭い運命のうえを吹き抜けたのだ。」⁽³²⁾

野鴨の飛翔に促されて、家鴨の脳髓のなかに「海原の地理学が展開しはじめる」ように、ひとりの同僚の計報に触れて、軍曹は自らの狭い運命を越えて、無限の海に旅立とうとする。海の荒波と強風に抗し、帆を広げ目的地を目指して進む船のイメージ、あるいは、「逆風に抗して大洋へと飛び立」⁽³³⁾ち、翼をいっぱい広げ、新たな生息地を目指す渡り鳥のイメージ、これこそサン＝テグジュペリにとっての「生きること」を正確に言い表わすイメージではないだろうか。

エル・マムーンがかつて味わっていた「沖の海原の味わい」とは、そのような生を生きるときに、人間の心のなかに生まれる充実感、躍動感を意味するものであるだろうし、リヴィア砂漠でのどの渇きに苦しめられ、いよいよ死を覚悟した語り手もまた、それまでのおのれの生を総括して、次のように述べてい

る。

「わたしにはなんの心残りもない。賭けをして、負けたのだ。それはわたしの職業にとって当然のことだ。だが、なにはともあれ、海原の風、それを吸いこむことはできたのだ。

いちどそれを味わい知った者たちは、その糧を忘れることはできない。そうだろう？ 僚友たち。危険に生きることが問題なのではない。このきまり文句は大げさだ。わたしは、闘牛士というものをあまり好まない。わたしが愛しているのは危険ではない。自分が愛しているものはちゃんと知っている。それは生きることだ。』⁹⁴⁾

サン＝テグジュペリにとっての「生きること」がここに明確に表現されていると言えるだろう。とはいえ、それは、ともすればそう誤解されがちな「危険に生きること」ではない。それは障害に立ち向かうことによって、自己を発見し、たえず自己を生成させてゆく生である。闘牛士はたしかに危険に生きている。しかし、そのような生がはたして自己発見、自己創造の「糧」となっているかどうか疑問である。逆に農夫や庭師はけっして危険に生きているわけではない。しかし、彼らは大地や自然というおのれに抵抗するものに立ち向かってゆくことによって、自己を発見し、自己を生成させてゆくことができる。危険は、人間が真に生きるために克服してゆかねばならない障害のひとつの現われであるにすぎず、けっして目的ではない。農夫が鋤を使って大地を耕し、収穫を目指すように、飛行士は飛行機を介して空を耕し、中継基地を目指す。たとえ空を耕す飛行士に死の危険がともなうにしても、両者の行為に質的な差異はない。両者とも、その過程において、自己発見、自己創造の生を生きていると言えるのである。

サン＝テグジュペリの「生きること」とは、要するに、おのれのなかに、生来約束されていた生を生きることであり、おのれの運命をまっとうすることである。サン＝テグジュペリにとって、そのような生こそ、人間にとって真の「幸福」であり、真の「贅沢」なのである。

「わたしはといえば、自分の職業のなかで幸福だ。自分は中継基地をめざす農夫だと思っている。郊外電車のなかでは、こことはまったく別の苦しみを感

じる！ ここには、結局のところ、なんという贅沢があることか！……」³⁶⁵

人間にはそうした生を生きたいという本能的な要請、「召命への欲求」がある。あのスペインのアナーキストの軍曹は、ひとりの同僚の訃報に触れて、この欲求を解放したのである。この訃報は、軍曹に、おのれの真の生を生き、おのれの運命をまっとうするよう誘う呼びかけであったということはすでに述べた。

「すべての人間」の具体例であるこの軍曹の話には、当然、「すべての人間」が軍曹と同じような状況に置かれたなら、軍曹同様、「召命への欲求」を解放するであろうという意味がこめられている。それを語り手は、「情況が彼らを鼓舞するとき、彼らはすべておなじ要請を表明するのだ」ということばで表わしている。だが、ここで「鼓舞する」という表現に注意を向ける必要があるだろう。ある情況のなかに置かれた人間が、その情況に鼓舞されるためには、その人間の内的、主体的な何かがそれに応えなければならない。ただ情況に恵まれるだけでは十分ではない。その情況に呼応して、その人間の側からの内的、主体的な働きかけもまた必要なのであり、それがなければ、人間は情況に鼓舞されることはないのである。「鼓舞する」ということばには、それゆえ、その情況に置かれた人間の側からの能動的な働きかけが前提されていると言えるだろう。では、外的な情況に応えるべきその内的なものとは何なのか。それはおのれのなかにある「召命への欲求」の自覚であるだろう。軍曹はそうした欲求の存在を自らのうちにすでに感じとっていたがゆえに、それを充足させてくれるであろう土壌に自らを植えこんだのである。この軍曹における「召命への欲求」の自覚は、バルセロナでの、会計係としての日々の仕事にたいする疑問のうちに読みとることができる。

「きみの仕事は、しだいにくだらぬものに思われてきた。きみの欲びや悩み、きみのささやかな安楽、そういうものはすべて、別の時代のものになってしまった。そんなものにはすこしも重要性が見出せなくなってしまった。」³⁶⁶

とはいえ、この自覚は必ずしも明確に意識されたものであるとはかぎらない。軍曹自身、自らの「奇妙な変貌」を「言葉に翻訳することはできなかった」³⁶⁷のであり、軍曹の行動を説明するために作者が持ち出す羚羊の寓話においても、羚羊はなにかわからぬ「磁力に引き寄せられて」いるのであって、「自分たち

が飼い主からのがれようとしているのだということは意識していない。』³⁸⁹

いずれにせよ、情況という外的条件と、「召命への欲求」の自覚という内的条件が相俟って、はじめて人間は真の自己を解放することができると言えるだろう。ところが、『人間の大地』のなかでは、往々にして、このふたつの条件のうち外的条件のみが強調されるきらいがある。前章で引用した「至高の召命」に従って生きた「数名の人間」について、語り手は「まずもって讃えるべきものは、彼らを築きあげた土壌なのだ」と述べて、環境や状況の重要性を強調する。また、かの少年モーツァルトの一節では、「一種黄金の果实」「魅力と優雅さとの傑作」「少年モーツァルト」「生命の美しい約束」と称される子どもは、「人間たちのための庭師はいない」ゆえに、結局は「他の子どもたちと同様に、型打ち機械の刻印を受け」³⁹⁰、「粘土の塊」に似たものとなってしまうであろうと語られている。

しかし、それなら逆に、「人間たちのための庭師」さえいれば、その子どもは自らのうちなる「モーツァルト」を解放することができるのだろうか、という疑問が起ってくる。この疑問は、二章の最後にとりあげた「老いたる役人」「いまここにいるわが仲間」にたいする、作者の「だれもきみを脱出させはしなかったが、それにたいしてきみにはまったく責任がない」、あるいは「まだ間に合うときに、だれもきみの肩をつかんでくれなかった」ということばにも向けることができる。「きみを脱出させ」てくれる者、「君の肩をつかんでくれる」者さえいたなら、彼らは自らのうちなる「眠れる音楽家、詩人、あるいは天文学者をめざめさせる」ことができたのだろうか。

『夜間飛行』のリヴィエールや『城砦』の族長といった人物は、たしかにサン＝テグジュペリの言う「人間たちのための庭師」であると言えるだろう。ルネ・マリス・アルベレスが言うように、「サン＝テグジュペリの生涯の最終目的は、他者の生を方向づけ磁化すること」³⁹¹であったかもしれない。サン＝テグジュペリが自ら「人間たちのための庭師」たらんと欲したということは、おそらく間違いではないだろう。しかし、「人間たちのための庭師」は、他者の生の開花を手助けし、促すことしかできないだろうし、開花を実現させるのは、あくまでもその人間自身である。同様に、苛酷な規律を課するリヴィエールを、

自分たちの指導者として受け入れることができるのは、リヴィエールの苛酷さの真意を理解し、リヴィエールと同じ目的を自らの目的として引き受けることのできる者だけである。⁴¹⁾とすれば、人間が自らの生を開花させるためには、その人間自身の内的意志がそれに参与しなければならないのであり、「人間たちのための庭師」に恵まれるだけでは十分ではないということになる。サン＝テグジュペリ自身、この内的意志の重要性をけっして否定してはいない。それは『手帖』のなかの次のことばに明らかであるだろう。

「次の事実の持つ重要性を十二分に認識すること。つまり、人間はけっして意識的に選択するのではないということである。もし人が現にある自分とは違ったものであるなら、自分がどういう人間でありうるのか、人はほとんどわからないのである。おそらくある呼びかけがあるだろう。しかし、それは不明瞭で漠としたものであり、有無を言わせぬものであることはめったにない。

それゆえ、改宗させることだけが可能である。」⁴²⁾

人間は自らの生を内的意志のみによって「意識的に選択」してゆくわけではない。外部からの「ある呼びかけ」もまた人間の生の転換に一役を担っているのである。しかし、この「呼びかけ」は相対的なものでしかない。「呼びかけ」が効力を持ちうるのは、それに呼応する人間の側からの応答がある場合だけである。その場合にのみ、人間はそれまでの生き方を改めて、新たな生へと踏みこむことができる。つまり、外的な「呼びかけ」と、人間の内的な意志とが呼応してはじめて、人間は自らの生を転換させ、今ある自分を変貌させることができる。それが「改宗させることだけが可能である」という最後の一行の意味するところであるだろう。

したがって、あの「老いたる役人」「いまここにいるわが仲間」と、いわゆる「数名の人間」とを分けるものは、環境や状況に恵まれたか否かという外的条件の違いだけにあるわけではない。内的条件の違いもまた両者を分かつものであるだろう。『人間の大地』の最終章で、語り手はこの「老いたる役人」「いまここにいるわが仲間」を再びとりあげて、次のように述べている。

「この書物も終わりまできて、わたしはふと思い出す。最初の郵便飛行の夜明け、運よく指名されたあと、わたしたちが人間に抜け変わる準備をしていた

とき、供まわり役をしてくれたあの年老いた事務員たちのことを。とはいえ、彼らとてわたしたちとおなじだったのだ。ただ、飢えを持っていることを知らなかっただけだ。』⁴⁹

人間のなかの「飢え」にも喩えられる本能的な欲求、つまり「召命への欲求」の自覚の有無もまた、「わたしたち」と「年老いた事務員たち」の運命を分かつものであったのである。同様に、「年老いた事務員たち」とスペインのかの軍曹とを分かつものもまた、この自覚の有無であるだろう。

人間の自己解放における「召命への欲求」の自覚の重要性、また、外的条件と内的条件の呼応の必要性は、『人間の大地』の六章で語られるバルクの話のなかにも読みとることができる。ただし、この話で問題になっているのは、「召命への欲求」そのものではないし、バルクの自己解放は、奴隷の境遇からの解放である。しかし、バルクの自己解放は、人間における「真の自分」の解放のひとつの寓意として読むことが可能であるし、かつての自由人であった自分を取り戻さんとするバルクの欲求は、「召命への欲求」に通じるものがあるだろう。

かつて家畜を追うという仕事で生計を立て、妻子とともにマラケシュで幸福に暮していたモハメッド・ベン・ラウシンは、ある日だまされてつかまり、奴隷として売られてしまう。モハメッドと同じように遊牧民の奴隷として売られてきた者たちは、ほとんどが自分の人間としての誇りや高貴さを取り戻すことをあきらめ、奴隷としての生活に安んじてしまう。

「彼らは、誇りを捨て、奴隷になりさがり、事物の安らぎのなかに入ることを楽しみと考えたのだ。奴隷は主人の憐れをおのれの誇りとする。』⁴⁹

奴隷としての生活は、主人に忠実に仕えてさえいれば、それほど苦しい生活ではない。むしろ平穏無事な生活である。ただ、そのような「奇妙なまどろみ」⁴⁹の生活に甘んじることができず、失われた誇りや、人間としての尊厳を取り戻そうとする者には、それは耐えられない苦しみであり、不幸であるだろう。しかし、ほとんどすべての奴隷は、すでに人間としての誇りを捨て、奴隷になりさがり、主人の優しさや善意を、自分の誇りとし、幸福とし、歓びとしている。

だが、かつてモハメッド・ベン・ラウシンであったバルクは、他の奴隷たち

とは違い、人間としての誇りや高貴さを取り戻すことをあきらめてはいなかった。「マラケシュ行きの飛行機にかくまってください」⁶⁶と、毎晩バルクは同じ嘆願を語り手に繰り返す。さながら、バルクにとって、語り手は「自分を癒すことのできるただひとりの医者」であり、「自分を救うことができるただひとりの神」⁶⁷であるかのように。この嘆願の執拗さと、逆境にあくまで抵抗し、人間としての誇りを捨てまいとするバルクの潔さに心動かされ、語り手は友人たちの助けを借りて、バルクを奴隷の境遇から解放することに成功する。

このバルク解放の物語のなかで注目すべきことは、バルクにとっての語り手の立場が、「海原の風」「沖の風」に通じる風の比喩で表わされていることである。

「わたしの黙殺も、その生活を返してやろうとしないわたしの煮えきらない態度も、彼は恨みに思っていなかった。わたしは自分のような人間ではなく、動き出させるべきひとつの力、なにか恵みの風のようなもので、いつかは自分の運命のうえに吹き起こるはずだと思っていたのだ。」⁶⁸

バルクはおそらく語り手のうちに、自分がかつて送っていた自由な人間としての生活を、再び現実のものとしてくれる奇跡のような力を感じとっていたのだろう。バルクにとって、語り手は、生身の人間であるというよりも、自分を解放してくれるはずのひとつの力であり、「恵みの風のようなもの」であった。そして、結果的に、この「恵みの風」は、バルクの運命のうえに吹き起こったのである。「召命への欲求」に目覚めた、かの軍曹の「狭い運命」のうえに「一陣の海風」が吹き抜けたように、バルクの運命のうえに「恵みの風」が吹いたのは、バルクのあくまで人間としての自分を取り戻そうとする欲求ゆえであった。軍曹がその「一陣の海風」に運ばれて、「真の自分」を解放したのと同様に、バルクもまた、「恵みの風」によって、失われたモハメッド・ベン・ラウシンという正真正銘の自分を蘇らせる。

バルクはたしかに情況に恵まれたと言えるだろう。しかし、失われたほんとうの自分を取り戻そうという執拗な欲求と、そのための必死の努力がなければ、あのような情況がバルクの身に訪れることはなかったのであり、むしろバルクの強い内的欲求に、外的情況が呼応したとさえ言うことができるだろう。

このバルクの話は、人間の自己解放における内的条件の重要性を明らかにするものである。すでに述べたように、「至高の召命」に従って生きた「数名の人間」について、たしかに作者、サン＝テグジュペリは、外的条件の重要性を強調している。しかしながら、「数名の人間」のなかには、自らのうちなる「召命への欲求」を自覚し、その欲求を充足させる環境や状況を自らに引き寄せえた者たちもいることを、作者は否定してはいない。「数名の人間」について、「まづもって讃えるべきものは、彼らを築きあげた土壌なのだ」と述べたすぐあとで、語り手は次のように言っている。

「たしかに召命というものもひとつの役割を果たす。自分の店のなかにおのれを閉じこめてしまう者もいれば、必要とされる方向をめざして、やむにやまれずおのれの道を切り拓いてゆく者もいる。」⁴⁹⁸

自らの召命を自覚し、それに生きようとする者は、「必要とされる方向をめざして、やむにやまれずおのれの道を切り拓いてゆく」。それが召命の果たす「役割」である。そして、そうした者たちこそ、バルクと同じように、内的な強い欲求によって、外的な環境や状況を自らに引き寄せうる者たちであるだろう。

注

- (1) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes*, t. I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1994, p.283 (以下この版からの引用はOC Iと略記する。) なお、《Terre des Hommes》からの引用文の日本語訳については、みすず書房刊、『サン＝テグジュペリ著作集』の第一巻、『南方郵便機・人間の大地』の山崎庸一郎訳をそのまま使わせていただく。ただし、一部解釈の違うところや、論理展開上必要と思われるところは、筆者の訳をあてたことをお断りしておく。
- (2) OC I, pp.283-284
- (3) OC I, p.284
- (4) OC I, p.285

- (5) OC I, p.171
- (6) Cf. コリン・ウィルソン著、柴田元幸監訳、『超読書体験（下）』、学研 M 文庫、p. 87
- (7) OC I, p.219
- (8) OC I, p.223
- (9) OC I, p.225
- (10) OC I, p.357
- (11) OC I, p.531
- (12) OC I, p.123
- (13) OC I, pp.179-180
- (14) OC I, p.269
- (15) OC I, p.269
- (16) OC I, p.269
- (17) OC I, p.269-270
- (18) 召命≪vocation≫とは、「神から召し出された使命」の意味であるが、「天職」や「使命」と訳すこともできる。
- (19) OC I, p.270
- (20) OC I, p.270
- (21) OC I, p.270
- (22) OC I, p.270
- (23) OC I, p.274
- (24) OC I, p.273
- (25) OC I, p.277
- (26) OC I, pp.275-276
- (27) OC I, p.276
- (28) OC I, p.275
- (29) OC I, pp.274-275
- (30) OC I, p.223
- (31) OC I, p.224

- (32) OC I, p.274
- (33) OC I, p.422
- (34) OC I, p.264
- (35) OC I, p.264
- (36) OC I, p.274
- (37) OC I, p.274
- (38) OC I, p.275
- (39) OC I, pp.284-285
- (40) R. M. Albérès, Saint-Exupéry, la Nouvelle Edition, 1948, p.176
- (41) Cf. 「とはいえ、その戦いのなかにあって、ひとつの沈黙の友情が、リ
ヴィエールと操縦士たちを、彼ら自身の奥底で結び合わせていたのだ。彼
らは、征服というおなじ願望をいだく、おなじ船の乗組員だった。」(OC I,
p. 142)
- (42) OC I, p.579
- (43) OC I, p.283
- (44) OC I, p.229
- (45) OC I, p.229
- (46) OC I, p.227
- (47) OC I, p.227
- (48) OC I, p.227
- (49) OC I, p.270